

詩同人誌評

第15回

同人誌が時代を作っていた時代があったという。今はどうだろう。

中塚鞠子

ここ何年か、文学学校に届く同人誌を読ませていただいている。隔月であったり季刊であったり、半年に一度であったり、年間一回であったりと発行の違いはあるが、同人誌の顔が見えて、詩の傾向も解ってくる。それはそれで個性であり主張であるから、当然だが、数年、十数年、更には数十年続いているものもあり、メンバーも入れ替わってくる。

改めて各同人誌の歴史を振り返りながら、作品を読んでみた。

「RIVIERE」は一九九一年創刊というから34年間隔月発行で続いていることになる。凄いエネルギーだと思ふ。

201号校塚ひさ「石ころ」

受け取ったのは
石ころだった

大小あれど

みんな石ころだった
ぶざまな

……(略)……

磨いてみた

一心に磨いた

少し丸くなったが

玉にはならず光らなかつた

石ころは

ついに石ころでしかなかった

……(略)……

石ころは石ころのまま

一つの意志なのだ

抱いて

歩いていくんだ

「石ころは石ころでしかなかった」と気づく切なさ。みんなそんな切なさを抱えて生きているのだ。しかし「石ころは石ころのまま」でひとつの意志なのだ」という強さ、潔さはどうだ。読む人は石ころを何だと受け取るだろうか。人それぞれの石ころがある。これを読むことで力づけられる気がする。

「アリゼ」も228号。隔月発行であるから38年になる。創刊メンバーは今では少なく、いろいろな人に引き継がれている。しかし発行人は以倉紘平で健在。隔月でこれだけ続けるのは大変だ。

227号十河裕子「祈りというほど崇高ではなく願うというほど慮っている訳ではない」

日々の緩やかな暮らしの中に
時折 流れをせき止める様な
瞬間がある

瞬きをするかしないか位の
その瞬間は

私の心の奥深く隠れている傷を
よみがえらせる

私は眉をしかめて

痛みを耐える

……(略)……

どうか消えておくれ

祈りというほど崇高ではなく
願うというほど慮っている訳ではない

この詩の持っている穏やかさと鋭さにハッと
とする。隠れている傷の痛みは、突然、一瞬
現われる。それは緩やかな暮らしをせき止め

る。そうでありながら、その瞬間に（どうか消えておくれ）と、祈りというほど崇高ではなく、願いたいというほど慮っている訳ではない、と穏やかというのである。その抑えて遠慮がちに消えてほしいという心の揺れが、かえって傷の深さを読者に思わせる。

同じく 228号 豊崎美夜「すぐれもの」

ミートプレス器なるものを買ってみた
円盤型の直径は二十センチ
厚みは一センチ
鉄製の重量九百八十グラムはずっしりと
重い

……………(略)……………

とりモモ肉をフォークでつつき
筋切りをして塩コシヨウ
熱したフライパンに油を引き
皮目を下にじゅうと焼く
さて それから おもむろに
肉の上にプレス器を載せる
……………(略)……………

このプレス器は
畢竟

立体を平面にするという

……………(略)……………

声をプレスすれば手紙に

顔をプレスすれば似顔絵に
音楽をプレスすれば楽譜に
……………(略)……………

これはまた恐ろしい「すぐれもの」である。
彼女には『チキンインザチキン』『ジャコメツ
ティ・サラダ』と料理にちなんだ名前の詩集
があるように、今回も調理器具ではあるが、
決して生活詩は書かない。常に、英国流とも
いえる諸譚、皮肉、ブラックユーモアが入る
詩になっているのだ。

「潮流詩派」は一九五五年からで、創刊70年
という。村田正夫が創刊し、詩・エッセイ・
評論・書評等と稀にみる充実した総合雑誌で
ある。村田亡き後、麻生直子が季刊で続けて
きた。先日休刊のお報せが入った283号が自宅
に届いた。会員も多く大変な作業をされてい
た偉業を思うと、残念ではあるが、とうとう
……と気持ち沈んだ。

「詩人会議」は現在750号。六十三巻第四号
というから、月刊で六十四年目ということか。
同人誌というより、同じ主張を持った仲間
の集まった組織の機関誌といえようか。平和
を願い、世界中の人たち一人ひとりが安心し
て暮らしていける世界を願う作品が多い。

おおむらたかじ「みずぼうそうのウイルスく

ん」

背中がむずがゆく つい掻いてしまった
農道散歩中に毒虫に刺されたか
すぐ良くなるさと甘く見た

痛みが出た 湿疹が出た あわてた
皮膚科に行くと老医師はきつちり言い切っ
た

带状疱疹！

そこでひょっこり頭をもたげて
笑った奴がいたのだみずぼうそうのウイル
スくん

……………(略)……………

オレだよ ひさしぶりだなあ
あれからオレは静かに休んでいたのにさ
目がさめちゃったよ なんか寒いな
チビのせいじゃねえよ おめえがチビの時
さ

おめえ 引っ掻いて 大変だったぞ
覚えてねえのか 大分くたびれたな おめ
え

おれの出番 弱り目に祟り目ってやつさ
しっかりしねえと……………

とウイルスくんは（悪いやつらが生き残っ

て／またぞろ戦争することになりかねえぞ」と、お尻を叩き、励ますのだ。年取って身体が弱り免疫が落ちて、出てきたみずばうそうのウィルスくんと会話がユーモアたっぷりである感じがこもっている。

同じく北村真「アリ」。これは散文詩であるが、中学生のミッチャンと小学生の主人公たちが、蟻の行列を見つけ、アリの巣を襲撃する。逃げ惑うアリたちを踏みつぶし、巣を破壊していく。

男の人が、子どもの頃無意識に、トンボの羽をちぎったり、蛙の口にストローを突っ込んで膨らまして遊んだなどと話すのを聞く。

この「アリ」の作品を読むと、へあの日の夕暮れを 汚れた白いシャツに張り付けたまま 背を丸めてあぜ道を帰っていったとあるから、今その情景が世界のどのような風景を思い浮かべ、心が痛んでいるがよく解る。子どもの頃の思い出なのだが、心に残る詩である。

「軸」157号は、大阪詩人会議の発行、季刊。テーマを決めて特集「思い出のあの日、あの時」を組んだり、エッセイの連載があったり、かなり充実した詩誌である。

「歷程」はご存知のとおり、昭和10年（一九三五）草野心平、中原中也、高橋新吉ら八人が始めたもので、戦時中昭和19年（一九四四）

中断されたが、昭和22年（一九四七）再刊されて、安西均、井上靖、石垣りんなどによって続けられたそうだが、以後、現在発行人を黒岩隆で、621号を出し、次号で90周年になるという。現在ある同人詩誌の中では一番の古株。さすがベテランの名前がずらりと並ぶ。現代詩まつしぐら、ということだろうが、同人が何人いるのか。名簿はついてないので分からない。創刊当時の熱い思いが続いているかどうか。

『黄薔薇』は、永瀬清子が昭和27年（一九五二）に岡山で始めたものである。

永瀬清子を慕い愛する人たちで、「永瀬清子生家」も保存会で守られ、いろいろな詩の催しもしながら、「黄薔薇」が発行されているようだ。

「孔雀船」106号 表紙もカラーで同人誌にはない煌びやかで賑やかな装いにつられて、覗いてみたら、なんと、内容も詩やエッセイだけでなく、「パンドラの詩匣」「孔雀船美術館」「孔雀船書架」「試写室」「リスニングルーム」などと、賑やかな楽しいものが満載されている。

島敏光（特別寄稿）「奇妙な手記」笈田敏夫と黒澤明のいる昭和の風景」は貴重な情報で大変面白かった。読者を楽しませる意気込みが貴重な詩誌、いや総合雑誌である。

「三重詩人」271号 いつ創刊されたのか分からないが、季刊で続けておられるからすでに67年は過ぎているはず。

三重はもともと、松坂に本居宣長、春庭などの国文学者が出て、紀州藩に属し富豪が多く、文芸の盛んな土地だった。

そこで永年詩誌が続いているのは嬉しい。

「舟人」は今年九月、創刊された。八十五歳の定道明と九十二歳の福井のベテラン詩人（小説家？）がタッグを組んで、これまたベテラン女性詩人二人が寄り添って。これを見るとばんやり歳を取ってはいられない、襟を正さねばと思う。

「窓」二〇二五年秋号は初めてお目にかかった。全編俳句とエッセイである。一人一ページ。上段が俳句、下段がエッセイ。百数人が俳句を書くには言葉や常句を厳しく選択するから、俳人はエッセイが上手い。読みごたえがある。編集・発行「窓の会」とあるが、「ことばカフェ」「句会」「常連集会」とあり、全国にまたがった大きな組織のようだ。「船団の云」解散後の活動なのかもしれない。坪内稔典さんのかげがちらほらみえたが、ねんてんさんは二年で主宰をやめた、とあり、この大人数を民主的に動かしているというからすごい。

作品の並べ方もそれがよく出ている。

「イリヤ」26号 三人誌である。シャンソン風の抒情詩が素敵でちよつと懂れる。

高丸もと子「静寂」

紺碧の空には

嘘はない

風の影まで地面に映す

一羽の鳥が空を横切っていった
あと

空だけが取り残されてしまった

しんと静まった空間のなかを、突然鳥が一直線に横切った、その線がまるで見えるように鮮やかである。

「タルタ」66号 季刊詩誌である。創刊者はすでに亡くなられている様子。美濃加茂、埼玉、鎌倉、水戸、北九州などと全国バラバラな所の九人。どういう集まりなのだろう。

井上和之「靴」

苦い記憶 良い思い出
靴底はすべて覚えていて

……………(略)……………

どこへ行ったか 何があったか

靴に聞いたらすぐわかる
安全靴が仕事に連れ出す
スニーカーが散歩に誘う
家から出たくない時も
彼らが連れていつてくれる

本人は靴を愛していて、大切に思っているのだが、事件が起きて科学捜査のような、面白みもある。

「木立ち」夏150記念号 福井の地で屹立して続いている詩誌。編集発行人は川上明日夫。季刊なのでやはり相当長く続いている。最近新しいメンバーが加わり面変わりしている感はある。

「笛」309号 この詩誌も古都金沢を中心に主に石川県のメンバーで続けられている伝統ある詩誌といつていいだろう。戦後間もなくの創刊だろうか。詩と詩論を標榜し詩だけでなく「詩誌展望」などにも取り組んでいる。

「saga」29号 には詩は4篇だけで、他50ページほどは戸谷岡による宮澤賢治についての論考で占められている。

「修羅」と「自然」そのII

― 宮澤賢治の彼方とは何処かも今回で終わりにしたとのこと。この膨大な

論考について、この号のみで感想を述べることはできないが、賢治の目指した世界は「まこと」の世界であったという。人間が相互に敵対し競走しいがみ合う「修羅」の様相を呈している世界を革新し超克して、扶助と協力の世界を実現することであり、その実現のための「羅須地人協会」であった、という。納得できる。実現が難い理想郷ではあるが。いずれ本として出されるのであろう。

「KAIGA」129号、これは寄稿文芸誌と銘打つてある。どれが主催者のもので、どれが寄稿なのかはわからない。

坂本達雄の「現代音楽の茶室」などの詩は、モダンズム詩なのだろうか、なかなか難解というか、私は苦手である。河野晋平「胸中みじめ節」は面白かった。方言が生きている。

「組香」十号は大阪文学学校の学生委員会の人たちの絆から生まれた文芸誌である。さすが大阪。表紙が万博の大屋根の写真で飾られている。題字は故池田かよ子なのも懐かしい。朝倉圭子「ぼくの風景」、「わたしの風景」は対になっている。

真夜中のあぜ道を真つすぐ走るぼくの
右手の中のちぎれたおりがみは赤いろ
吐く息は白く色づきながら風に飛ばされ

ほくだけを置いて消えた

足元にさざめくバラストの音符は夜行性
心音に似た銀色の子守り歌が聴こえる
秘やかに並ぶ枕に頭を沈めてほくは
大地に伸びる二本の腕の中で眠る

僕の片側には光る死の光

もう片側を命がおぼつかないに這う
瞬間、鼓膜が破られ時が止まった

神様の膝小僧の前で躓いたほくの
泥で汚れた左手を母が固く握った
夜明けに蒼い山が見えたから世界が少しだ
けゆるんだ

〔ぼくの風景〕

あなたが自殺しようとしたのは
過去と現在が重なり合う時間
鶴として生まれるはずの赤い折り紙は机の
上で
胎児のまま安らかに眠る

今日はあなたと一緒に山に登ろう
絶望の亡骸を弔いに
まっ白なおにぎりを持って
今 あなたが見ているあの山へ

もしもし、息子は今日、学校をお休みしま
す

いえ、大したことではありません
そう、すべては大したことないのです

最後まで生き残ったマンモスの足跡を
クロウサギの親子が跳ねる
わたしも笑って未来へ続く道へと進む

〔わたしの風景〕

私はもうドキドキしながら、固まって二篇
の詩を読んだ。ほつとした。上手く書けてい
ると思った。他の人の詩もエッセイも小説も
さすがである。

「★飛脚」52号 石毛拓郎の個人誌。面白い
のは不定期刊としてあるところ。何物にも縛
られたくない、それでいて確固たる意志を持
つ詩誌なのだ。今回は八月十五日刊で敗戦忘
念便。詩で、エッセイで、評論で、共に闘っ
てきた闘友愛敬浩一の記念号でもあろうか。
石毛拓郎「屑の叙事詩 ウラン、人形峠」、
すっかり忘れ去られているウラン鉱排出の跡、
放射能が残っていることを思い出させる。
原発を新たに作る話もちあら。再考を投げ
かけられる。

「ぼとり」79号は、たけにしよしかずの個人

誌。毎回詩はテーマを決めて、今回は「灯火・
そして光」。毎回「万葉集を読む」「ぼとりの
本棚」というのが載っていて、それがなかなか
面白い。勉強しておられるんだなと思う。
季刊でこれだけ書くのは大変かも。

「夜凍河」25号 滝悦子の個人誌。センスの
いい作りになっている。

「ブライム」58号 芦屋市の蘆田敦子が発行
人になっているが、来歴は解らない。エッセ
イだけに絞ってある。少人数だが、カラー写
真などもいれ丁寧に創られている。
奈良行博「常在菌のはなし」は面白かった。

今は同人誌が時代を作っていくとは思えな
い。が新しい未来を、新しい世界を見つめて
書き続けてほしいと思う。

【受贈詩誌】

「アリゼ」227・228号・「イリヤ」26号・
「KAIGA」129号・「gaga」29号・「黄薔薇」
225号・「組香」10号・「孔雀船」106号・「木立
ち」夏150号・「詩人会議」750号・「軸」157号・
「タルタ」66号・「潮流詩派」282号・「飛脚」
52号・「笛」309号・「ブライム」58号・「舟人」
創刊号・「ぼとり」79号・「窓」2025年秋
号・「三重詩人」271号・「夜凍河」25号・
「RIVERIE」201・202号・「歷程」621号。

